郷土室だより

第 24 号
昭和54年6月30日
(平成14年3月31日増刷)
編集・発行
東京都中央区立 京橋図書館
東京都中央区築地 1-1-1
電 話 3543-9025

切絵図考証 一一

安藤菊二

旧築地三丁目（続）

○春日兵庫助（未考）

○伊東鑒之助

『安政六年武鑑』に「父主殿、伊東兵庫助、祐膺、交代御寄合表御礼衆、二千石、在所日向那珂郡飫肥、高なわ東禅寺、上、西本願寺門跡前」と記す。この人であるかどうかは不明。

○花房長左衛門

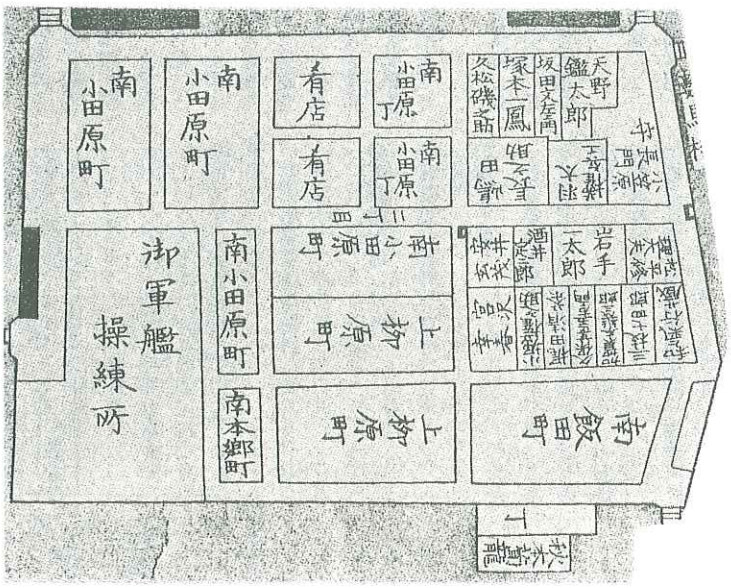
「御使番衆、千九石」（『文久三年武鑑』）

「父長左衛門、花房又十郎、三百俵つきじ」（『安政六年武鑑』）

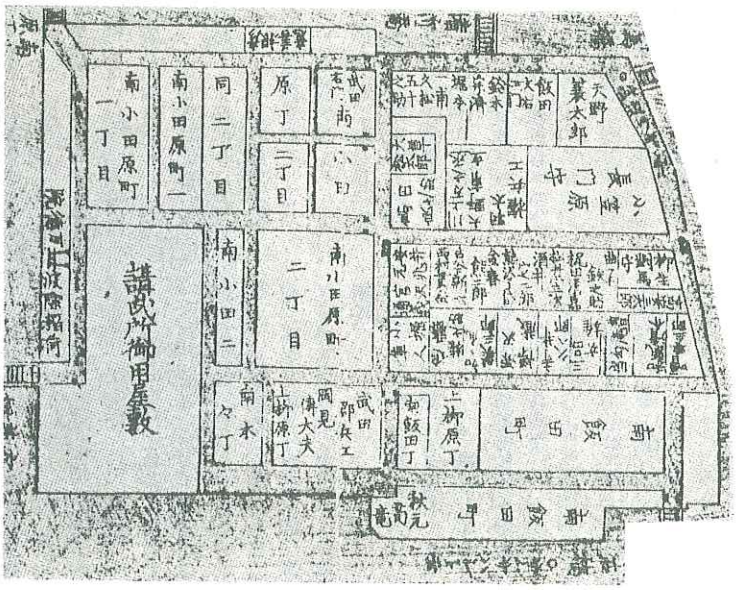
○中山啓三郎（未考）

○太田元禮

御医師。『安政六年武鑑』に「太田元禮法眼、二百俵、八丁ほり」と見ゆ。



文久元年（1861）尾張屋版切絵図（部分）



嘉永6年（1853）近吾堂版切絵図（部分）

第16　旧南小田原町　三丁目・四丁目

明治初年に南小田原町三丁目、四丁目となった地域はもとは武家地で、現在は築地七丁目になっている。この地域の武家屋敷は小笠原長門守を除くと小身の旗本が多く、尾張屋版切絵図では一八軒、南飯田町の秋元荷竜を加えても一九軒を記すにすぎぬが、近吾堂版ではもう少し詳しくなって三一軒の氏名を記すほか、南小田原町二丁目の河岸に、彦根善意、上柳原町に武田郡兵ヱ、岡見傳大夫らの氏名を掲記している。

これは紙面狭隘のため、代表的な氏名を掲記したからこうなったので、元より漏れた御家人衆も多い。天保九年武鑑を検すると

△御台様御用人の内、取次上番
　つきじ小田原丁　高井新右ヱ門
△御数寄屋御坊主衆
　つきじ小田原丁　松井通勝
　〃　梶田清嘉
△表御坊主組
　つきじぴぜんばし向　鈴木宗済
△表御坊主衆
　つきじぴぜんばし　岸本玄済
　〃　岸本玄琢
　つきじ□ばし　近藤友意
　つきじぴぜんばし向　鈴木宗哲
　つきじ小田原丁二丁メ　田中順哲

といった人達の名が見える他、近くに

　つきじかるこはし通　伊藤順寿
　つきじかるこはし　伊藤道斉
　つきじあい引はし　近藤友古

などいう人もあってこの周辺に小身の御坊主衆が屋敷を貰って住んでいたことが知られる。

次に尾張屋版切絵図に載る人々について気付いたことを記そう。

○天野鑑太郎（未考）

○坂田文左ヱ門（未考）

○塚本一鳳

近吾堂版切絵図に「堀本一甫」とあるのが正しい。寄合御医師で「三十俵十人フチ、つきじ小田原町」と『安政六年武鑑』に出ている。

堀本氏は、初代重顕以降、代々口科の奥医を勤めた。初代重顕は元禄五年一一月二三日召されて御医師に烈し、享保八年正月二一日死、年九一。芝金杉の安楽寺に葬られた。後代々の葬地とする。重顕の後は松本氏の男を迎えて養子とした。諱は顕晴、好益また一甫と号した。宝暦四年五月二一日死。年七一。跡は男顕承が継ぎ、宝暦四年八月四日遺跡を継ぎ、明和五年六月三日死す。年四三。妻は桂川甫筑国訓の女を迎えた。蘭学の家桂川家と親戚となったわけである。

顕承の跡は、男彝珍（つねたふ）が継ぎ明和五年九月六日遺跡を継いだ。以下『寛政諸家譜』に載せる所を引用する。

安永九年三月二十四日本城および西城の御広敷に候し、天明四年四月十九日奥医に列し、六年浚明院殿薨御により、十月七日寄合となる。

寛政三年九月二十九日かつてより諸大名の邸宅に出入するを事とし、その身分を顧みざるよし聞えあるのところ、今もなをやまず、曲事のいたりなりとて小普請に貶（おとし）し、出仕をとどめられ、十月二十九日免さる。

八年三月三日淑姫君（家斉女）の診脈を候すべきむね仰をかうぶる。九年正月二十三日寄合となり、八月二十日奥医に復す。

つね珍（たふ）の後は元悌（もとやす）（好益）が継ぎ、「寛政九年十二月二十二日将軍家（家斉）に拝謁す。時に二十六才」と記し、以後の記載を欠いている。

この屋敷については、市史橋、市街編第四二に「屋舗渡絵図証文」の記録を載せる。

図略、嘉永四年渡辺半十郎拝領ニ付渡ス

築地小田原町　寄合医師堀本一甫当分拝借地、坪数弐百坪

東北、西丸新御番仙台能登守組羽太権兵衛。西南、誠順院様御用人島田長之助。東南、道。西北、御書院番小笠原加賀守組柴田熊太郎

東北弐十弐間四尺、西南弐十三間余。東南八間二尺余。西北九間余

築地小田原町甲府勝手小普請鈴木金四郎様上地弐百坪、拝借人有之候迄堀本一甫願之通当分拝借地被成御渡之、四方間数、御絵図之面、御定杭之通相違無御座奉請取候。為後日仍如件。

嘉永三戌年七月四日

寄合医師堀本一甫内
深谷六兵衛（印）

御畳奉行格御普請方下奉行
鈴木治兵衛殿

（他略す）（市街篇四二―一一〇二頁）

○この拝借地は翌年三月二日に、御馬方渡辺半十郎に譲っている。（市四三―三三頁）

○久松磯之助

嘉永六年の切絵図には「久松五十之助」とある。名は祐之（すけゆき）、通称は磯之介ほかに翠翁、幽篁庵と号した。『東都遊覧年中行事』の著者である。（『三田村鳶魚全集』二一巻四〇〇頁）

金山正好氏「中央区史跡散歩上」（学生社版）に、祐之は幕臣で『村田春海門下の小林歌城（一七七八～一八六二）に国学

を受け、和歌をよくした。『いさゝむら竹』『江戸年中行事』『大隅地理拾遺集』『近世事物考』『詞のさきくさ』『俳諧雀』などの編著がある。」と記してある。

○嶋田長之助

「盛姫君様御用人。七十俵、赤坂黒くわ谷」（『天保九年武鑑』）

この屋敷を拝領したのは天保一〇年であった。

天保十亥年十二月九日
芦屋郡次郎拝領屋敷
鉄砲洲築地南小田原町
盛姫様御用人並　嶋田長之助
四百坪余。（市街篇三九―七四頁）

○羽太権太夫

西丸御番仙石能登守組の与力。

○小笠原長門守

長坦。三千石の旗本。○御書院番頭四番組、文政十二丑六日ヨリ（『天保九年武鑑』）。京都町奉行（『安政六年武鑑』）。江戸町奉行（『文久二年武鑑』）。

○松平修理太夫（未考）

この松平修理大夫の邸地は、近吾堂版切絵図（嘉永六年刊）には柳生対馬守となっており、『京橋区史』上巻付録の文久二年の御府内沿革図書の図には、「桂川甫周」と記してある。

今泉みね刀自の『名ごりのゆめ』にこの邸の憶い出が語られているが、同書の付録に、今泉源吉氏は「元治元年三月廿五日甫周（七代国興）は、歩兵差図役小西従次郎の拝領屋敷たる築地飯田町の地面千二百坪を譲受く。本文の鉄砲洲の邸（三九頁）は之なり。此処は今の小田原町一丁目三番地付近に当り、明石橋（昔の寒さ橋又さんさ橋）下より海へ流れ込む幅広き堀川に沿ふ角屋敷にて、現在湯浅屋角屋等の商店はその跡を占む」と註しておられる（本書は昭和一七年の刊行）以下、少し長いけれども、『名ごりのゆめ』の文章を引用しよう。

大川端

桂川のやしきが築地中通りから鉄砲洲の方へとひっ越したのは、私がおはま（浜庭の奉行木村氏の役宅）から帰って来てからと思ひますから、多分十一か十二位の頃でございませう。ここは大川に沿った角邸で、門に向って右隣は路を隔てて小笠原、その反対側の隣はたしか土井とか云ったお邸で、その長屋に賃作秋坪さんが住んでゐて、二三人ある子供の中に大六といふ方があったやうでした。遊びませんでしたけれど、石の投げっこをして喧嘩をした事もあります。こっちの庭には山があって地の利をしめてゐましたので、女の子ながらいつも勝身でした。（中略）

前の通りと川との間はみんな石でしたが、ふだんは人っ子一人通らないさびしいところで、通れば何か変事でもありさうな場所でした。……父はけしき〳〵と言ってけしきばかりたっとんでゐました。植木ずきで、ふしんをするにも植木がさきでしてね、古い〳〵幹の大木も何本かございました。鶴が来て遊んでゐた程でしたから随分広いいゝ庭で、何でも千坪以上あると申してゐたやうでございます。只今この宅にあるのと同じ木振りで、もっと大きい百日紅が池に向かってすっとさし出てゐました。びんぼうやしきですから手も十分はひってゐませんが、何と云っても悠長なものだったといつも思ひ出します。

調練場と西洋館

お隣りの小笠原やしきとは細い道一つ隔ててゐて、そのしきりには椎の木がありました。この小笠原さんは多分大名だったのでせう。かまへが大がかりでした。御主人は見た事もございませんが、馬がいくらもゐまして、やすっぽい縞の袴をはいた侍が大勢見えました。はい〳〵と馬に乗ってゐながら穴玉を投げ合ってそれがよく往来の方へ飛んでくるので弱りました。名前は小笠原ですけれども、馬のけいこ場だけにして居て空屋だったのかも知れません。それは〳〵汚くしてゐました。けいこがすむと小笠原の紋ぢらしの浅黄色のはんてんを着てゐた仲間が箒をも

御府内沿革図書の附図
文久2年（1862）調査

桂川甫周國興
（今泉氏蔵）

ってしきりに掃いてゐました。

藤沢の叔父（筆者註、陸軍奉行）が裏金陣笠でこの屋敷に調練に来た事がございましたが、おみね坊とも何とも申しません、それもその筈こちらは堂々と見物するのではありません、塀に小刀で方々ふし穴をあけて、覗いてゐたのでございますから。

小笠原の方では時にはこちらを馬鹿にして、唐人やあい、などと石をぶっつけたりした事がございました

その訳と申すのは、宇都宮さんは桂川が好きで／＼泊り込みで来ていらっしゃるうち場所も気に入られたと見え、やしき内の小笠原のすぐそばの所にお部屋までおこしらへになりました。それが西洋ぶしんなのでございます。たしか十畳二間位上下あった様に思ひます。それにもう一間はストーブをたく所、一寸いま珍しいと思ひますのは、外も中もずっと白壁で塗りつぶしてあって、押すと開いたりする戸棚や何かがありました。それから家のまはりは、摺鉢をひっくり返したやうな西洋の庭が出来ました。五寸ばかり土を高く盛って円いのや四角いのや、薔薇は薔薇ばっかりといふ風に出来てゐました。それがまた妙な庭で、花壇だといっても今見るやうなのとも少し違ふやうでした。……そしてそのお庭も充分出来きらないうちに御維新の騒ぎとなってしまひました。（同書、一六〇～一六五頁）

○岩手一太郎

御腰物方。二百石高。つきじ。（『文久二年武鑑』）

○嘉永六年刊、近吾堂版切絵図では岩手屋敷の処に、曲フチ鉄之助、梶田清嘉、松井小三次の名を記している。曲渕鉄之助は「御進物御番、五百石、つきじ小田原丁」と『安政六年武鑑』にあり、松井小三次は、「御能触流、二百俵三人ブチ、つきじいゝだ丁」と『安政六年武鑑』に見える。

○梶田清嘉は、『天保九年武鑑』に「御数寄屋御坊主衆、つきじ小田原丁梶田清嘉」とあり、天保一三年版『広益諸家人名録』二編に「画家、名勇、字数馬、一号南斎、築田小田原丁」と載っている。

小田原町の小禄の旗本は武鑑から捨いだすに困難だが、その内御作事下奉行豊藤省吾に譲り、代地として、土岐大内蔵の拝領屋敷だった南飯田町の屋敷を得たのである。七三郎はこの時小普請組大岡兵庫支配世話取扱という役であった。（市街篇四〇～三四〇頁）

○秋元荀龍

南飯田町の埋立地に記されたこの人は、天保一三年版『広益諸家人名録』によれば、詩と書で知られた人で、名は坤、字は厚哉、甲山と号し、一号を春星草堂といった。白河藩松平家の家臣で、山下御門内の居住としてある。

○三枝七四郎

七四郎は七三郎の誤記である。天保一三年一二月二〇日に行われた九人相対替で、今まで住んでいた裏六番町、地積四百坪の拝領屋敷を、御畳奉行格

＜参　考＞

尾張屋版切絵図に載る築地地区居住の人物は以上に尽る。ついでに『当世諸家人名録』に載る築地地区居住の聞人の名を列挙しておこう（便宜上、明石町地区居住の人物をも掲げておく）。

文化一二年版

画、雪峰　築地　小倉徳三郎
聞人、女護島　鉄砲洲　高橋興市
書詩、弘斎　築地カルコ橋ノキワ　巻　右内

文政元年版

学者、磐水　築地小田原町　大槻玄沢
学者、磐里　同居　大槻玄幹
学者、因是　築地　葛西健蔵
画、卜庵　築地本願寺前　山本十次郎
国学、彦麻呂　築地　斎藤嘉齢

天保七年版

儒、香山　築地三枚橋　井部万三郎
画、南溟　築地三枚橋　春木南溟
画、南華　同　春木扇之助
蘭学書画、翠藍　築地中通　桂川甫賢
儒道学、得所　築地中通　長戸寛司
小説、鳳洲　築地中通　森島甫敬
儒文章、西磐　築地小田原町　大槻恒輔
狂歌、清熙　向築地　岡見彦三
画、江嶺　築地小田原町　梶田清嘉
書、松眠　鉄砲洲　高木新右ェ門
画、南斎　築地万年橋　紅呉鋭之助

文久元年版

詩書、馬門　鉄砲洲船松町中川旅宿　実相院
画、桜写真　築地中通稲葉侯藩　中居儀八郎
書、道斎　築地小田原町　村田啓次郎
書、雲室　築地門跡院内　宝林寺
画、雲栄　築地軽子橋　長島雲英女
画、啓運　築地小田原町　狩野谿運
画、仙丹　築地　大西仙丹
書、菖谷　築地軽子橋　長島昌甫
画、翠翁　築地小田原町角　久松裕之

◇東京を語る会　第27回

日時　六月二十三日（土）
午後一時三十分～午後三時
演題　中央区の史跡―その特色―
講師　金山正好氏
（著書　『中央区史跡散歩』『中央区の文化財』等）